

「米国ボランティア事情見聞」報告書

本報告書は、平成7年4月30日から5月7日の間、弊財団関係者が米国の事情について短期間ではあったが、調査したものをまとめた抜粋である。

目 次

I. はじめに 米国調査の意義

1. 問題意識
2. 阪神大震災でのボランティア活動
3. 三菱化学傘下の海外企業、事務所に調査依頼したこと
4. 米国のボランティア状況を踏まえ焦点を米国に絞って調査したこと

II. 訪問先及び調査出張者

1. 訪問先名簿
2. 調査出張者

III. 訪問記録

1. 総括
2. 訪問記録

IV. まとめ

1. 日米比較
2. 今後の高齢者の役割
3. 財団としての今後の展開

V. 参考資料

1. 三菱化学傘下企業、事務所からの回答
2. 訪問先からの資料

I. はじめに 米国調査の意義

1. 問題意識

日本ではボランティア活動は育って来なかったと思う。その理由をあげるのは難しいが、敢えて言えば

ア. 一つの島に一つの国が2000年に亘って存在し、その間外国による支配もなく、一貫して強力な政府が人民の上で支配して来た。これには天皇制が役立った。

イ. 民族は元は大陸系と南方系とあったものが、完全にミックスして今やお互いに単一民族と信じている。

ウ. 沢山の宗教が仲良く併存している。国民はキリスト教の儀礼にも仏教の儀礼にも神道の儀式にも抵抗無く出席する。中世には仏教は神道なりと信じられた事さえあった。而も大多数を占める仏教は、個人の悟りに重点があり、他人へのサービス活動はキリスト教ほど活発でない。

この様な事から

ア. 救援とか介護の仕事は行政が為すべき事と考えがちであった。又、政府が命ずれば従うが自発的には動かない傾向もあった。

イ. 政府は外国からの援助申出を渋る傾向がある。1923年の関東大震災ではフランスやアメリカ等からの復興援助を断ったそうであり、1995年の阪神大震災（死者5000人以上）では、フランスからの救助犬を連れたレスキュー隊の受入れをためらったし、イギリスの医師団も医師法の関係で活躍出来なかった。閉鎖的である。

ウ. 宗教団体を中心としたボランティア、チャリティ活動も欧米程活発でないように思う。

2. 阪神大震災でのボランティア活動で感じたこと

平成7年1月17日未明 関西を襲った「阪神大震災」は日本が地震国であることを再認識させると同時に、一方では日本人のボランティア活動について改めて考えさせられる大事件であった。日本の「自発的ボランティア」の黎明期と受けとめた。学生達や企業の従業員のボランティアが全国各地から神戸を中心に参集し、義損金も過去の数度の地震時と比較出来ない位集まった。

しかし、三ヶ月経った今は急激に減少した。4月から新学期が始まったからであり、企業も長期の欠席を認めないからであろう。中途半端な面もあるが日本ではかつて見られなかった現象である。

又、ボランティア活動に参加した人達にどういう役割を振り分けるのかといった調整役（コーディネイト役）不足も指摘されたり、活動を支える資金不足も課題として残された。

日本各地で各種団体がボランティア活動を進めている状況であり、当財団理事でもある堀田力氏の「さわやか福祉財団」はボランティアの数値目標を1200万人とし精力的に活動されているが今後ますます高齢化が進む日本にとってボランティアの問題は重要な社会的課題になってくると思われる。

ともかく「阪神大震災」はボランティア活動について真剣に考える機運になったことは間違いないと思われる。

3. 三菱化学傘下の海外企業、事務所に調査依頼したこと

海外に進出した企業は何らかの形で地域に対し社会貢献することが事業を順調に伸ばしていくために必要であるといわれている。

三菱系企業は世界各国に進出しており、各地で様々な社会貢献をされていると想定されるが、全てを調査することは相当長期に亘るし資料も膨大になるし、一方種々各社にご迷惑をおかけするので、その点の配慮をし、まず調査対象を絞ることにした。

その点で、三菱化学も米国を始め、各国に進出しており

- ・ その地域でいかなる社会・地域貢献をしているのか
- ・ 又、その地域でいかなる寄附・ボランティア活動が行われているかについて、アンケート表を作成、送付し調査することとし、回答を得た。この回答を得て、調査対象を絞ることにした。

4. 米国のボランティア状況を踏まえ焦点を米国に絞って調査したこと

1992年版米国国勢調査「寄附とボランティア」によれば米国では、1991年に18才以上の人で184.4百万人が平均2.1H/Wボランティアに従事しており、そのうち半数の51%の人94.2百万人は4.2H/Wボランティア活動をしていることが報告されている。

さらに同報告によれば、ボランティア組織で正規に働く人を含む正式ボランティアでは、1991年で15.2万Hとなりこの時間は常勤勤務者では9百万人の常雇用者に相当し、かつ金額換算では1760億ドルに相当するといわれている。その他に無料で子守りをしたり学校祭でクッキーを焼くといった近隣や組織を助ける非公式ボランティア時間が5.3百万Hあるといわれている。

一方、寄附も1991年には95.3百万人の人が平均年収の1.7%を寄附したといい、年収の5%以上寄附した世帯も15%にのぼったといわれる。

かかる点を踏まえ米国に焦点を絞り、「浅く 広く」よりも「深く 狭く」を選んだ。

化学傘下の子会社の2社に的を絞り、又、州を違える事（インディアナ州、ニュージャージー州）に留意した。

高齢者対象を第一義に調査したい処であるが、一般福祉にも及ばざるを得ないと覚悟した。

II. 訪問先及び調査出張者

1. 訪問先名簿 略

2. 調査出張者

三菱化学（株）顧問 前岡 秀彦

当財団研究企画部門 部門長 山根 吉城

Ⅲ. 訪問記録

1. 総括

1) 今回の訪問先、面談先はインディアナ州インディアナポリスで4件、ニュージャージー州で9件と計13件にのぼった。。

内訳としては、ユナイテッドウェイ（募金活動）2件、病院2件、給食配食サービス2件、ボランティア団体代表との会談1件、リタイアメントコミュニティ（自立～ナーシング）1件、シニアシチズンセンター1件、アダルトデイケアセンター2件、高齢者用アパート1件、高齢者小規模短期有料老人ホーム1件と多種多様で対象者も健康でダンスに興じる高齢者からナーシングホームで苦吟する入居者と米国における福祉の現場にまで踏み込んで調査することが出来、ボランティア活動だけでなく米国高齢者の置かれている立場や姿の調査もすることが出来たのは収穫であった。

また、インディアナポリスとニュージャージーの2ヶ所で Meal on Wheels のボランティア者の車に実際に乗車して食事サービスで各戸を訪問出来たのは貴重な体験であった。

2) 特に今回の訪問先の特徴点は次の通りである。

ア. 全米退職者協会（AARP）や全米ボランティア協会等に伍して積極的に募金活動に特化した活動を実施（企業での給与引去り制度実施）し、各種団体に公正、適正に配布しているユナイテッドウェイの活動を知ったこと。

イ. Meals on Wheels ということで給食配食サービスが日常生活を支援するための大切なサービスとして位置づけられ、月曜から金曜日まで、昼、夕食の2食実施されていること、又、その配送をボランティアが担当していること。

ウ. インディアナポリスのSenior Citizen's Center、Incで朝の午前11時頃高齢者が大ホールでダンスの練習に興じている元気な姿を見たのが印象的であったこと。

エ. カソリック教会運営のデイケアセンターや個人経営のデイケアセンターで体を弱めた高齢者が敗残者のごとく片隅にひっそり生きている姿を見たことは、強者の論理が強い米国では、同じ弱者でも米国は日本よりさらに住みにくい国ではないかと感じたこと。

オ. しかし、いずれの施設や活動においても随所にボランティアの存在が必要と強調されていたこと。

2. 訪問記録

1) 訪問先概要 96頁参照

2) 訪問記録(略)

IV. まとめ

1. 日米比較

今回は短期間なので、十分に実情を掴めたとはいえないが、日米のボランティアについてまとめてみた。

1) 日本においては、江戸時代を經由して明治、大正、昭和を通じて、社会の運営は「お上」に任せるものであり庶民が口を出すものではないという人々の感情や行動が強い影響を持ってきたことからボランティアという発想が育ちにくい風土にあったといえよう。

2) アメリカのボランティア活動の特色

ア. アメリカでボランティア活動の発達した理由

元々多国籍、多人種国家であり、更に毎年移民を受入れている現状から、ボランティア活動に参加する事は、新たにアメリカ国民となった人間が、既存のアメリカ社会に受け入れて貰える最も手っ取り早い入門料であり、又同時に踏絵でもある。

その手段としては寄附金と労働奉仕があるが、前者はやや外から見えにくいですが、後者は見え易い。何れも当然の文化として根付いている。

ご参考迄に「高齢化時代のボランティア」（岩波書店）の著者である田中尚輝氏（社団法人長寿社会文化協会常務理事）のご意見も紹介しておこう。

「米国でボランティアが盛んなのは意識的に作り出した社会システムであることを考えた方が妥当である。つまり、400年程度の歴史しかなく、米国を開拓した最初の人々は移民であり、何も無いところに町を作っていくにはそれぞれ助け合うことが日常の行動規範になっていないと正常に機能しないし、ボランティアや市民事業団は米国人にとって身近な国家である」。

かかる観点に立って考えると、米国のボランティア活動は日本にとって極めて参考になる活動様式ではあるが、日本はそれを参考にしつつも独自に努力して根付かせる必要のある風土であり、生い立ちであると考えられる必要がある。

イ. ボランティア活動の中味

アメリカのボランティア活動の基本はやはり寄附金である。その上に労働奉仕が乗っていると見てよさそうである。

7) Untied Way と云う全国組織は第1次大戦後非常に上手に組織化されたようである。競争者も少なかったらしい。多人種、多宗教の国にとっては大変必要な組織である。団体からも個人からも寄附金を集めている。労働奉仕が無料とは云いつつも、活躍の道具や原材料の一部には金がかかるのである。その原資が寄附金と云う事になる。又カソリック等の宗教団体毎の寄附もあるが、対象が限られているようである。

8) 援助を受ける人々の発生要件が日本とは違う面もある。

「離婚による片親家庭の発生」「性風俗からくる若年者の子育て」「麻薬常用による廃疾者の発生」「白人種に多いアルツハイマーの50才代発病と痴呆」

2. 今後の高齢者の役割

1) 2025年には4人に1人が65才以上の高齢者になると推計されている。その時点での日本の状況は、政治、経済、文化、社会の仕組み等すべてに亘って高齢者の存在を無視出来ない情勢になっているであろうし現時点で推定出来ない情勢、環境に変化していることが想定出来る。

2) その時点における日本国民がいかなる状況であることが「しあわせな長寿社会」であるのかこれを調査、研究し提言していくことが当財団の使命であろう。

昔のように向こう三軒両隣りといったお互いに助け合う互酬制度の世間が実施出来るか、といった一つのテーマをベースにしても、増加していく高齢者のボランティア活動が重要な社会的課題であることは十分推定出来ると思う。

ボランティア活動が本当に日本に根付くのか、又どうしたら定着した活動として認知されるのか、ボランティア団体を法人格（事業体）として許認可する法的問題や寄附に対する税制上の問題など、クリアすべき案件は多いが、国民一人一人が真剣に考える問題であると思う。

3. 今後の展開

金の面でも労働奉仕の面でも日本ボランティアの中心核が出来るのか、もう少し模様見が必要かと思われる。行政主体にした政令が出来るかも知れない。

ただし三菱Gでは「高齢者対応ベース」の腹積り位は構築しておく必要があるのではないだろうか。その一助として阪神被災者群の中から「ボランティア活動と高齢者」と題する意見（論文）を徴するのも一法であろう。

（前岡見解：十分検討する必要があるが。）

V. 参考資料

1. 三菱化学傘下企業、事務所からの回答（略）

2. 訪問先で受領した資料（略）

訪問先概要

日時	訪問先	州・市	概要
5/2	United Way of Central Indiana	Indiana州 Indianapolis	1918年チャリティボックスで募金開始 1994年 31億円を10%の経費を除き 82団体に配分した
"	Meals on Wheels, Inc	"	Winona Hospitalの裏側にある厨房 「ヘルスケアファシリテイズ」から月～金曜 昼、夜食給食サービス実施
5/3	Indianapolis Senior Citizen's Center, Inc	"	55歳以上がメンバー、ダンスなどの交流 昼食、健康促進プログラムなど健康人の 集会所、30年以上前に開設
"	Holy Trinity Adult Day Care Center	"	カソリック教会経営、13年前に開設 家族と住んでいる60歳以上に資格 日本のデイケアとデイサービスの中間
5/4	Hackettstown Community Hospital	New Jersey州 Hackettstown	1973年開設、106床 ウエルネスセンター計画（企業従業員向） 健康維持プログラム
"	Heath Village	"	1965年開設、自立者用アパートから 24時間介護のナースング施設を所有 55歳以上、入居一時金1～2万ドル
5/5	United Way of the Greater Lehigh Valley	New Jersey州 Washington	地域の一支部、2人で運営 担当エリアは広いがグループとしては小さい
"	Warren Hospital	New Jersey州 Phillisburg	1929年開設、214床 Geriatric Assesment and Case Managements Service（在宅サービス）が特徴
"	Meals on Wheels	"	Warren Hospitalの厨房から昼、夕食をボラン ティアが給配。 月～金曜 12～13人×5コース/日
"	ボランティア団体のリーダ ー、代表者と会談	"	給食サービス、Warren Hospitalのボランティ ア部門の人などとの会談
"	Kresfield Adult Day Care Center, Incorporated	New Jersey州 Washington	11年前に自分の家で妻と始めた 8～17:00 月～金曜 21人登録 12～16人/日 25～85才の障害者
"	Heckman House Senior Citizen's Residence	New Jersey州 Phrllisburg	1978年、住宅公団運営アパート 62才以上、100室 家賃 275～280ドル/月
"	Hunterdon Hills (Residential Care Facility)	New Jersey州 Glen Garden	5年前開設、1～3人部屋30人入居可能 65才以上、自立出来る人、最長4年 現在28人入居、女性圧倒的に多い